

# わがわがわが

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編 纂 室  
第八号 稲倉石特集号

平成二年五月一日

## 半世紀の歴史・稲倉石丁特集号

### 稲倉石鉱山発見のいきさつ

明治十三年、茅沼から山越えをして来た茅沼炭鉱の雇員であった英国人が、雪道に迷い、樵をしていた大井嘉造の山小屋に助けを求めた。その時に鉱石の鑑別法について教えをうけたのか、その後、仲間の猪股五平と共に薪材流しをしていて、偶然

昭和二十年の冬、自家発電により全山一斉に電灯がついた。その時、私は一瞬あまりの明るさに言葉を失った。戸外に飛び出して、ずらりと並んだ長屋の窓から、明るい光が雪に映えるのをいつまでも飽かずに眺めていた。(『ていけい』より、稲倉石鉱業所長石川利雄)

に金鉱の露頭を発見したのだという。それで、発見した二人の名前をとって、(大股鉱山)と名付けられ、北海道鉱山会社が採掘にあたり、明治二十二年から同二十七年頃までは金・銀鉱山として、三百人程が居住する市街地が出来ていたというが、その辺のことについてはよくわかっていない。

学校のグラウンドは山峡の町にとつては唯一の平坦地で、住民のあらゆる行事に使われた。

### 白樺に囲まれて

三塁のすぐ後ろは道路で、外野は山の草むらであった。児童・生徒数が一四九名という学校の

### 旧体育園誕生

父母の願いが実り、昭和四十年六月開園式。鼓笛パレードもあり、まさに稲倉石始まって以来という壮観な行事であった。

前を左折すると社宅街があり、百四十世帯、六百人の人口を有する古平町大字沢江町番外地である。

第二浴場を過ぎて坂を登ると最大の繁華街(稲倉石銀座)である。生協・公民館・保育園・遊園地・診療所・娯楽センター等が密集している。買い物はすべて生協なので、毎日のおかずまで同じ様なものになってしまふ。

### 高橋藤蔵さんの手記より

鉱山の鎮守でもある稲倉石神社の例祭は六月十二日で、この日には全山挙げてお祝いをする。この高台からは社宅街が一望でき、この境内に立つと、深山の静けさの中で神聖な気分になることが出来る。

### 稲倉石鉱山の歴史

- ★一八年 古平町在住の大井嘉造と猪股五兵衛の兩人が露頭の鉱脈を発見する
- ★二六年 北海道鉱山会社が採掘を始める
- ★二七年 高田為五郎が経営金銀銅鉱を採掘する
- ★三一年 採算が合わず休業
- ★三六年 函館・国屋忠五郎がマンガンを採掘、原鉱のまま移出していたが中止する
- ★七年 久原鉱業KKがマンガン採掘を始める
- ★九年 休鉱となる
- ★四年 鉄興社が稲倉石鉱山を一万二千元で買収する
- ★同年 操業を開始する
- ★五年 同鉱の探鉱面を強化し、所長石川利雄が着任
- ★同年 万盛坑の主脈をなす大鉱床を発見する
- ★六年 経済界の恐慌のため同鉱業所を一時閉鎖するが四か月後操業を再開する

開町百年記念作文優秀作

『これからの古平』

稲倉石中学校二年

張 江 文 彦

ぼくのすむ古平町は、小樽・札幌などの大きな都市にくらべ、ほとんど名前の知られていない町ですが、今年でもう百歳にもなるといいます。北海道が来たのとほぼ同じに出来たことになりました。(略)

古平はぼくのふるさとです。美しい町です。想い出がいっぱいあります。ですからぼくはこんな古平に夢があります。

第一に、ここに工業が発達することです。いま、稲倉石鉱山があるのですから、その鉱石を使う工業が発展して、製品が港から本州や外国へ送られていくようになることです。

第二は、工業が発展して鉄道や道路が発達することです。今

の道路では時間がかかって困ります。電気機関車が通れば、人も荷物も計画的に時間通りに運べると思います。農業は、肉牛や新鮮な野菜が短時間で運べるのでくさりません。

最後は漁業です。もっと船を大きくし、港の設備も完全にしてい、外国と交渉して、もっと遠くまで魚をとりに行くことが出来るようになってほしいと思います。また、魚をそだててとる方法も考えていかなければなりません。

ぼくの三つのちっぴけな夢ですが、工業と漁業がいつしよになれば、工場の廃液で魚が死ぬという問題もありますが、現代の科学、将来の科学で解決をすることが出来ると思います。

稲倉石の山祭り

このお祭りでは、山にも夏が来る。ほとんど全員が会社に関係があり、鉄興社村のお祭りであった。行列は各戸をくまなくねり歩き、山の安全と家内来福を

この百年をきっかけに、理想の町を作ってもらいたいと思います。

そうすると、漁業と工業が一つになって、町は市になり、高校も大学も出来て、古平町で生まれ、古平町で仕事をし、古平町で一生を送ることにみんな喜びを感じるでしょう。

美しい海と、美しい山、夏は海水浴、冬はスキーが出来、そして、おいしい魚や貝、新鮮な野菜と牛肉を食べてみんな健康になり、観光客も何百人も来るようになって商業も発展するでしょう。

こんな古平になることを夢に見、夢を見ることで勇気づき、胸のふくらむ思いで勉強にも一段と活気がわいてくるのです。

祈願する。天狗の火渡りが最大の呼びものだが、時にはその天狗が転んだりすると拍手と爆笑がおきる。子ども達は暗れ着を着飾り、終日、さわぎ、呑み食い、楽しんで疲れた頃に、もとの山の静けさがもどってくる。

- ★九年 古平港町事務所と同貯鉱所を新設する
- ★十年 稲倉石鉱山が重要鉱山に指定される
- ★同年 電動削岩機二台を購入、機械掘りを開始する
- ★十一年 同鉱山がマンガン鉱産出高全国一位になる
- ★同年 診療所を開設する
- ★十五年 元山・堤の沢間の索道を古平まで延長する
- ★同年 巡査出張所が設置
- ★同年 古平港に鉱石積込み用の埠頭を新設する
- ★十六年 郵便局が開設される
- ★十八年 稲倉石鉱業所私立青年学校の設立が認可される
- ★二十年 米軍機の空襲で鉱員と船員等二十一名が死亡
- ★同年 終戦により同鉱業所の生産を停止する
- ★二十二年 新学制による稲倉石中学校を小学校に併置する
- ★同年 同鉱業所生産を再開
- ★二十七年 従来の従業員組合を労働組合と改称する
- ★二八年 稲倉石小中学校が新築落成する



# 射水丸米軍機の攻撃で沈没

## 多数の死傷者を出す

昭和二十年七月十五日午前七時頃、折から鉱石積込み中の射水丸が、突然襲って来た一機のグラマン戦闘機の攻撃を受け忽ち沈没。解で荷役中の作業員や射水丸の乗組員が激しい機銃掃射を受けて死傷者が続出した。この時、岸に泳ぎ着いた負傷

者を救助したのが港町の細野六次郎さん、細野長作さんの兄弟で、負傷者をリヤカーに乗せて蓮実分院や、ここが手狭になると劇場に運び込むなどして治療に当たらせた。

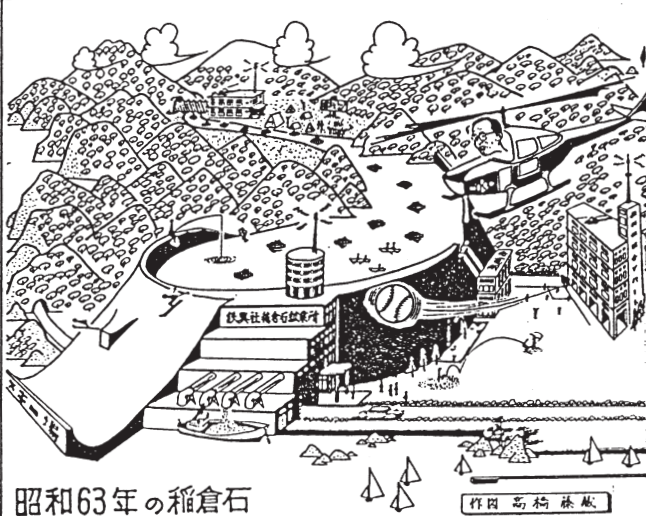
この時の活動により、当時の藤田善平町長から感謝状と記念品を受けている。

空襲による死者は十九名にも上り、この内鉱業所関係者が五名、射水丸の乗組員が十四名、外に行方不明者が二名いた。

火葬にするにも火葬場が間に合わず、仕方無く禅源寺裏の墓地のくぼ地に薪を積み、野焼きで火葬にしたという。

### 《未来の稲倉石》

昭和四三年五月発行の社内報『ていけい』に掲載された、高橋藤蔵さんの描いたイラストです。



### 稲倉石小唄

作詞・中村 覚（浜町在住）

(一) 稲倉石の鉱石は

東洋一のマンガン鉱

石はほんのり桜色、

脈を求めて

脈を求めて

掘り進む (二番省略)

この唄を懐かしく思い出される人も多いと思う。曾て鉱山で働いていた中村覚さんが作詞をし、社内報『ていけい』の編集

### 韓国人労務者 の強制労働

昭和十五、六年頃、当時の労務課長が韓国へ行き、七十人から八十人の労務者を連れて来たことがある。

昼食に明太魚の煮込みを出したところ、「大変うまい」といって喜んで食べていたという。太平洋戦争になり、強制的に連行され労働させられた人達も

長であった小山賢さんが作曲をしたものである。

稲倉石の美しい自然は残っても、そこには「東洋一のマンガ鉱」を産出したやまの姿を見ることはもう無い。

かなりの数になると思われる。そして、その待遇を巡って一時鉱業所側と対立し、不穏な状況になった事もあったというが、これらについての記録は全く手許には無い。

### あとがき

「せたかむい」のひとつの企画として、町内の地域のことをとり上げてみたいと考えていました。時代に伴いその盛衰を辿る中で、過去、古平町の経済を一方で支えていた（稲倉石地区）の、ある時のひと駒を集めました。年代も新しく、歴史というより、「思い出」といった方がいいかも知れません。この特集を組むに当たっては、高橋健一さんに大変お世話になりました。